

9月に入って、学校も幼稚園も始まり、子どもたちの元気な声が戻ってきました。しかし、わたしたちの生きている世界は、相変わらず、そして、以前よりも、多くの難しい問題にあふれていることも事実です。コロナの感染は一向に収まらず、ウクライナでの戦争を終結の兆しが見えません。国内政治もとても落ち着いているとは言えません。さらに、集中豪雨に加え、台風も接近しています。

そんな状況の中で、あえて、ルーティンのように教会に集まり、み言葉に耳を傾け、共に祈り、聖体をいただき、まるで何事もなかったかのように家路につくのはなぜでしょうか。この問題だらけの世界、そして、人間が住みかとしている地球そのものも、地球温暖化の問題や、異常気象の発生、そして、いつ起きてもおかしくない巨大地震が象徴するように、とても安心できる状態にあるとは言えません。だからこそ、今日の日、「被造物を大切に作る世界祈願日」にさだめられているのです。そんな変転極まりない現実の中で不安を抱きながら、わたしたちは皆、どこかで変わらないもの、頼りになるものを求めています。いわば、荒れ狂う海の中で、方角を示す羅針盤、変わらない北を指す指標を探し求めているかのようです。便利な車のナビさえも働かない、そんな行き先の見えない旅路を照らす光を求めているのです。

今日のみ言葉は、そんなわたしたちに何を語っているのでしょうか。第一朗読の『知恵の書』は、そんなわたしたちの不安と恐れの対極をなす、確かな方、誤ることのない方がおられ、人間に知恵と霊を送ってくださると語ります。「死すべき人間の考えは浅はかで、朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋が、悩む心を圧迫します。…あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、だれがみ旨を知ることができたでしょうか」と。旧約の知恵は、愚かで悩みに満ちた存在、限界に包まれた人間に、大いなる存在、変わらない存在そのものである神が、自らを現わし、かかわってくださると教えます。

そして、福音は、神から遣わされた主イエスこそが、神のみ旨、神の望みを告げる真の知恵と霊を授ける方であると告げます。イエスが示す神のみ旨、神の望みは、人間の知恵の教えとは異なります。真の知恵を得ようとするもの、真の道を歩もうとするものにイエスは言われます、「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子ども、兄弟、姉妹を、さらに、自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来るものでなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」と。人間にとって、一番頼りになると思っている家族、さらには自分自身の命でさえ、憎む(＝手放す、放棄する、捨てる)のでなければ、そして、自分が最も避けたいと思う十字架を担ってついて来なければ、イエスの弟子ではありえない、と。さらに言われます、「自分の持ち物を一切捨てないならば、誰一

人として私の弟子ではありえない」と。はたして、一体、だれがそのような道をあえて選ぶでしょうか。

しかし、教会の歴史を振り返ると、文字通り、そのような道を歩んだ人たちがおられます。初期のキリスト者、まだキリスト教が公認されず、迫害が広がっていた時代イエスに心底従おうと思った人は、すべてを投げ打って、殉教の道に進むことをためらいませんでした。そして、迫害が終わり、平和が訪れたとき、真剣にイエスに従おうと思った人々は、ぬるま湯のような街中を離れ、孤独な独居生活を送って祈りにまい進したり、共同生活をしながら祈りと労働に励む修道生活を始めた人々もありました。そして、時代が進んで修道生活の中にも様々な問題が生じたとき、街中に戻り、貧しさの中で、福音を宣べ伝える新しい道を切り開いた人もいました。

そして、時代の要請に応え、より広い社会の中で、様々な活動を通して福音の喜びと希望を人々に証ししようとする動きは、今も絶えることはありません。

人間誰もが持っている執着を捨て、これこそが自分ものと思っているものをすべてかなぐり捨てて、主イエスに倣って生き続けようとすることは、だれにでも開かれた道です。そして、このイエスに従って生きることこそが、不安や闇に道を迷う人々に真の光を照らし続ける道なのです。今日も、こうした神の家に集う恵みをいただいてわたしたちが、主の招きに応え、主の示される道を勇気をもって歩きだす恵みを祈りましょう。
(S.T.)